

当博物館所蔵の斧について

山崎 真治

Axes in Folklore Materials of Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

Shinji YAMASAKI

1. はじめに

当博物館には、いわゆる斧に関する資料が多く収蔵されている。本稿では、当博物館所蔵の斧について民俗資料を中心にその概要を紹介し、沖縄の斧の実際とその歴史性を考える手がかりとしたい。

斧を体系的に論じた和文の文献としては、吉川金次氏による『斧・鑿・鉋』(吉川 1984) や佐原真氏による『斧の文化史』(佐原 1994) があり、渡邊晶氏の『大工道具の日本史』(渡邊 2004) は、多角的視点から大工道具全般の歴史を論じている。沖縄の民具に見られる斧については、上江洲均氏らによる記載(上江洲 1973、上江洲・神崎・工藤 1983など)があり、沖縄の鍛冶技術については朝岡康二氏の『南島鉄器文化の研究』(朝岡 1991) が詳しい。沖縄の遺跡出土の鉄斧を含めた鉄器については『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』(沖縄県立博物館 1997)において総括的検討が行われている。

とりわけ、物質資料としての斧に関する基礎的な観察、記載、研究の方向性は、佐原真氏による一連の研究(佐原 1977、1982、1994)に尽きていると思われる。以下ではここに挙げた諸研究を援用しつつ、沖縄の斧の特徴を紹介する。

なお、今回の記載はいわゆる斧のみを対象とし、斧と深い関わりをもつ鑿や鉋等には言及しない。また沖縄の農耕具として特徴的なヘラ(ヒラ)にも、

斧との関係で取り上げるべき特徴があるが、準備不足のため触れることができなかった。このため、今回の記載には不十分な点が多々あると思われるが、今後の課題としたい。

2. 当博物館所蔵の斧

2-1 呼称・分類・用途

沖縄の斧には、ウーヌ(ウーン、ブヌ、斧)、ティーン(ティン、手斧)、ユーチ(ヨキ)などの種類があるとされる。沖縄・奄美各地における斧の方言名については、『琉球諸島の民具』(上江洲・神崎・工藤 1983)に詳しい。

今回の記述にあたって、斧の各部位の呼称については佐原真氏の用語を参考とし(佐原 1994)、必要に応じて左面、右面、前面、後面を呼び分ける(第1図A、C)。また鉄斧形態の呼称については渡邊晶氏の用語を参考にした(渡邊 2004: 75頁)。なお、沖縄の遺跡出土の鉄斧には、鋸造品とされるものも散見されるが、今回紹介する民俗例の鉄斧は、すべて鍛造品と考えられる(※笹田朋孝氏(愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター)の御教示による)。

以下では、便宜的に沖縄の民俗資料に見る鉄斧を、主として刃部の形状からⅠ類(ウーヌ型)、Ⅱ類(ティーン型)、Ⅲ類(ユーチ型)に分類して記述を進めることにしたい(第2図、第1表)。

第1表 斧の分類

分類	種別	斧身の形態	刃部の形状	用途
I類(ウーヌ型)	縦斧・横斧	無肩無段袋式	両刃(偏心両刃)	木材の伐採・加工(大斬り)、石材加工?
II類(ティーン型)	横斧・縦斧	有肩袋式・有段袋式	片刃・両刃	木材加工(斬り)、農作業
III類(ユーチ型)	縦斧	孔式	両刃	木材加工(大斬り、斬り)、農作業、石材加工

* 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.



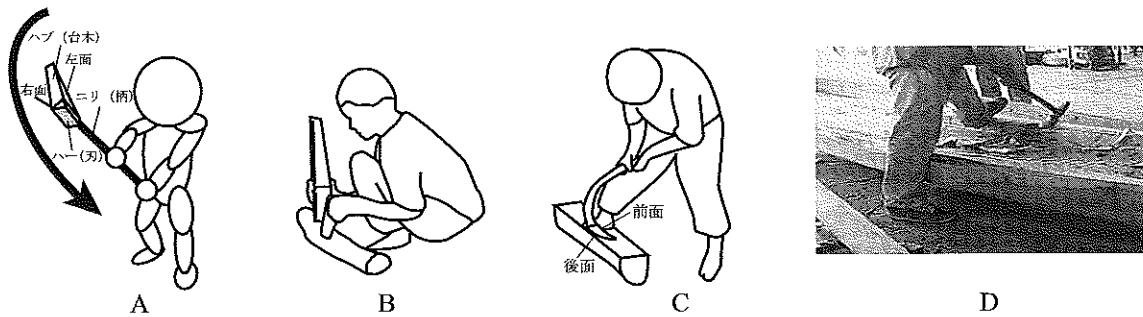
1・2 I類（ウース型：無肩無段袋式）

3～5 II類（ティーン型：有肩袋式）

6～8 III類（ユーチ型：孔式）

0 20cm
Scale = 1:4

第2図 鉄斧の形態と分類



第1図 斧の使用法と部位名称

A・B 鉄斧I類の使用法、C・D 鉄斧II類の使用法

(B・Cは東村史編集委員会編 1988より作図、Dは大城昇氏（糸満市）のサバニづくり映像より)

第1図 斧の使用法と部位名称

A 鉄斧I類（ウーヌ型）

鉄斧I類は、木製の柄（ニリ、イー）を取り付けた台木（ハブあるいはカブ、雇柄とも呼ばれる）に、分厚い鉄製の刃（ハバ）を装着する型式のものである。刃部はいわゆる袋式鉄斧の形態で、基部から刃に向かって除々に厚みを減じる（無肩無段袋式）。袋部は密閉されず断面形状はコの字形を呈する。袋部の開放部は左主面側に位置するのが原則である（第2図1、2）。鉄斧I類は、縦斧として用いられることが多かったようであるが、横斧としても使用されたという記録がある（内原 1987）。

B 鉄斧II類（ティーン型）

鉄斧II類は、I類と同様に基部に柄を挿入するための袋部を有するが、刃先は薄く、刃部から袋部へは肩部や段をもって移行する（有肩袋式）。袋部の形状には密閉型と開放型の両者が認められる。刃の装着方法によって縦斧の形態をとる場合と、横斧の形態をとる場合がある（第2図3～5）。

C 鉄斧III類（ユーチ型）

鉄斧III類（ユーチ型）は、鉄製の刃に柄を挿入するための貫通孔が設けられた縦斧（孔式鉄斧）である（第2図6～8）。

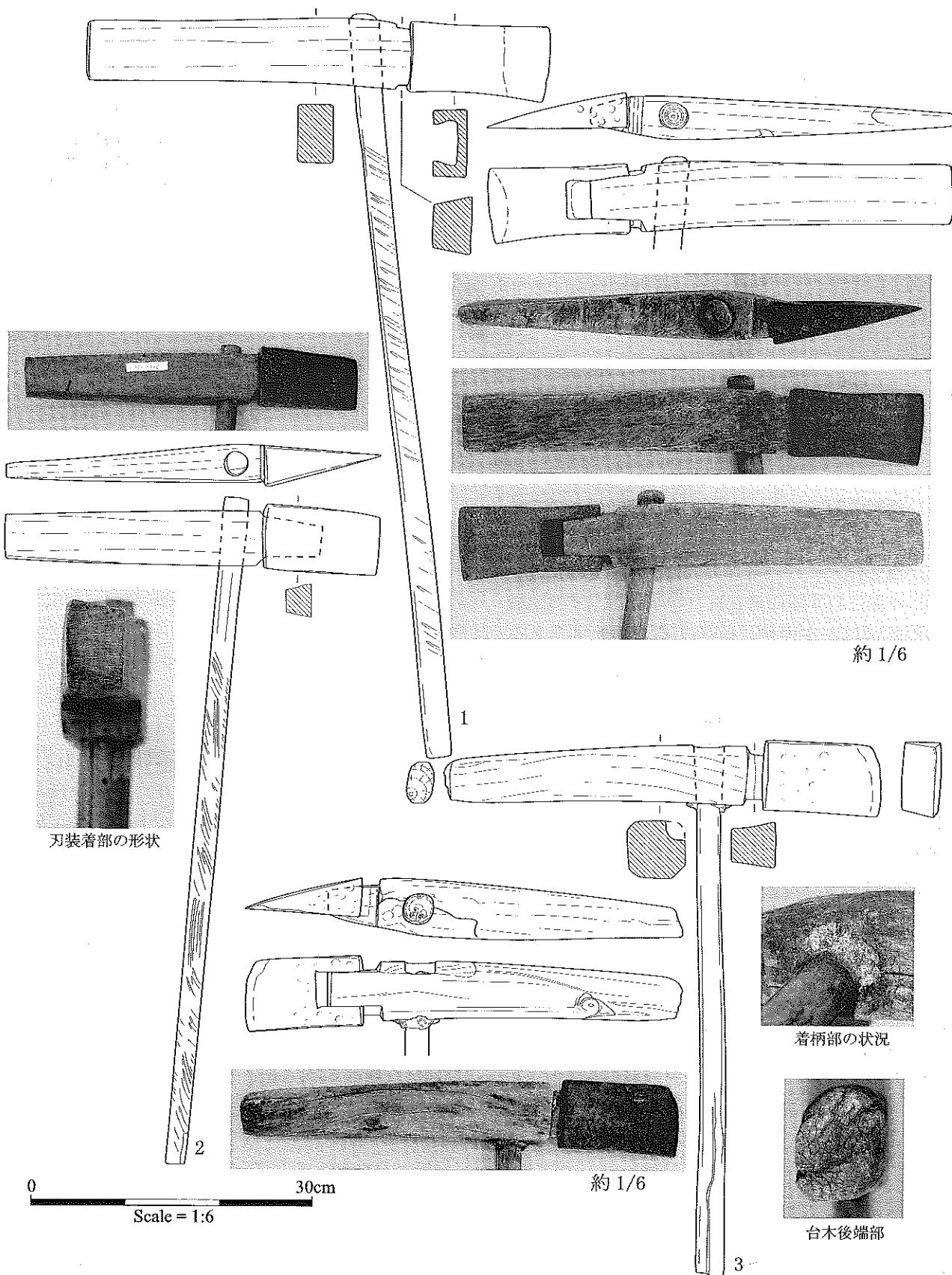
次に、斧の用途について述べておく。斧の用途としては木材を対象とした伐採、加工、薪割りなどが主だったものであるが、木材以外を対象とする場合も少なくない。サトウキビ栽培のさかんな沖縄では、

サトウキビの収穫にも斧が使われる。石灰岩を切り出し、加工する石工は、石材加工用の石ユーチと呼ばれる斧を使っていた（上江洲 2005）。鍛冶師が鉄板の裁断に用いる鑿の中にも、形態的には斧に似たものが見られる。

このように、斧の用途は多様であるが、歴史的に見て斧の最も主要な用途は、木材の伐採、加工であった。現代では木材の伐採はチェーンソウやノコギリに取って替られたが、上江洲均氏は、国頭地方では明治中期まで山仕事はもっぱら斧と山刀によって行われ、鋸の導入はごく最近のことであったと述べている（上江洲 1973）。これは西表島でも同様であつたらしい（内原 1987）。ノコギリの普及後、斧の役割は木材の分割や粗削りなどに限定されていったようである（幸喜 1989）。

大工道具としての斧について体系的に論じた渡邊晶氏は、斧をA類（樹木や原木の切断に主として用いる鉄製縦斧）、B類（原木の荒切削（大研り）に主として用いる鉄製縦斧）、C類（部材の荒切削（研り）に主として用いる鉄製横斧）に分類している（渡邊 2004：102頁）。沖縄の斧では、渡邊氏の言うA類とB類が未分化で、A類にはI類（ウーヌ型）が、B類にはI類（ウーヌ型）とIII類（ユーチ型）の一部が相当するものと見られ、C類にはII類（ティーン型）やIII類（ユーチ型）をあてることができよう（第1表）。

次に、実際の斧の使用法について言及しておく。斧の使用法について筆者が参照できた資料は乏しいが、木材を対象としたI類、II類の使用法を第2図



第3図 I類（ウーヌ型） 縮尺1/6

に掲げる。I類は伐採や薪割りに使用されていたという記録から、上から振り下ろすような使用法が主であったと思われる。ただし、『東村史』巻頭図版(東村史編集委員会編 1988)には柄を取り外した状態の刃付きの台木で、楔を削る様子を写した写真が掲載されており(第1図B)、鑿のように用いられることがあったようである。また、当博物館所蔵の鉄斧I類(ウーヌ型)の中には、「石大工斧」と記載されたものもあり、鉄斧I類の中にも多様な用途のものが含まれていた可能性がある。

II類の使用法については、複数の資料にあたることができた。『東村史』巻頭図版(前掲)や当博物館所蔵の大城昇氏(糸満市)によるサバニづくりの様子を記録した映像では、立位で片足で材を踏みつけ、斧を手前に差し出すような格好で材を削る様子が見られる(第1図C, D)。なお、後述するように『南島雑話』(名越 1984)にも鉄斧II類を使って材を削る様子が描かれているが、こちらでは座位での使用となっている(第8図)。

以下では、当博物館所蔵の斧について分類ごとに記載する。また、第3表には今回扱う資料全22点の一覧表と計測値を示す。

A. 鉄斧I類(ウーヌ型)(第3、4図)

鉄斧I類は8例あり、すべて縦斧である。このうち、第3図3は原薄に「石大工斧」とあり、他とは用途が異なる可能性がある。

第3図1~3は全ての部位が揃った完全なもので、図示しなかった2例を含め、全部で5例ある。第4図4、6は柄を失ったもので、6A、6Bは別々に図示したが、本来は組み合わせて使用されていたものである。5は刃部のみ残るものである。以下、部位ごとに見ていくことにしよう。

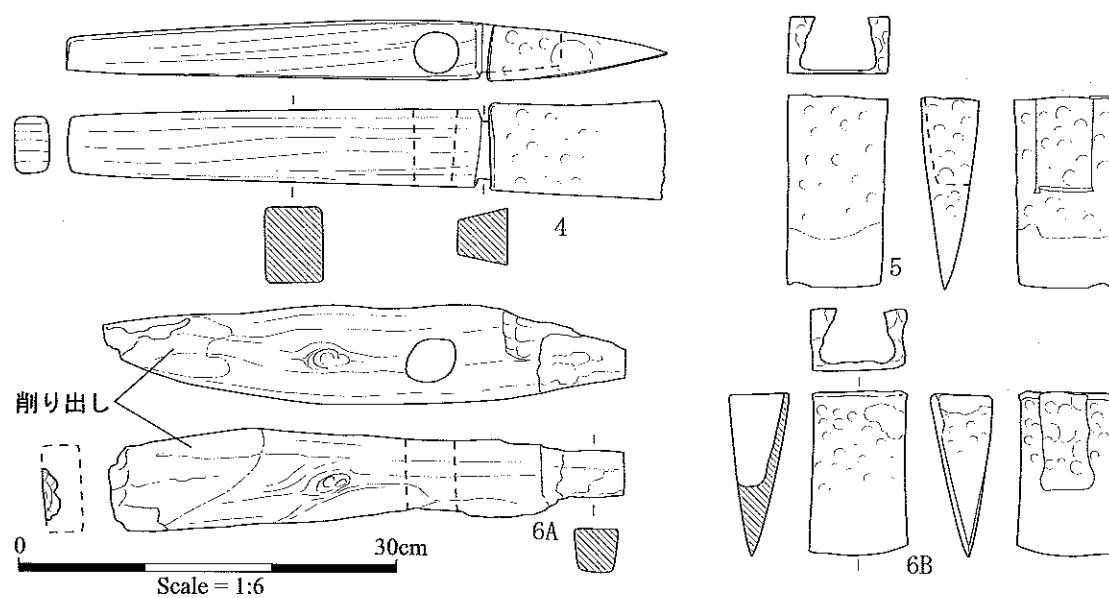
まず刃の形状には、基部から刃部まで幅に変化のないもの(第3図2、3、第4図5)と、刃部に向けてわずかに広がるもの(第3図1、第4図4、6B)が見られる。図示しなかったものも含めて前者が5例、後者が3例ある。刃部の形状はわずかに弧状をなすものが多いが、5のように直線的なものもある。刃部の幅は7~10cm内外で、およそ三寸とされる(内原 1987)。斧身には鑿痕の残るものが多い。

台木への刃の取り付け方は、原則として袋部の開放部側が左面に来るよう取り付けられる。したがって、この場合は刃線が柄に平行する縦斧となる。当博物館所蔵の鉄斧I類は、すべてそのような取り付け方となっているが、「柄を入れる孔の位置を変えて、手斧のような使い方もする」(内原 1987)という記録もあり、横斧として使用される場合もあったようである。

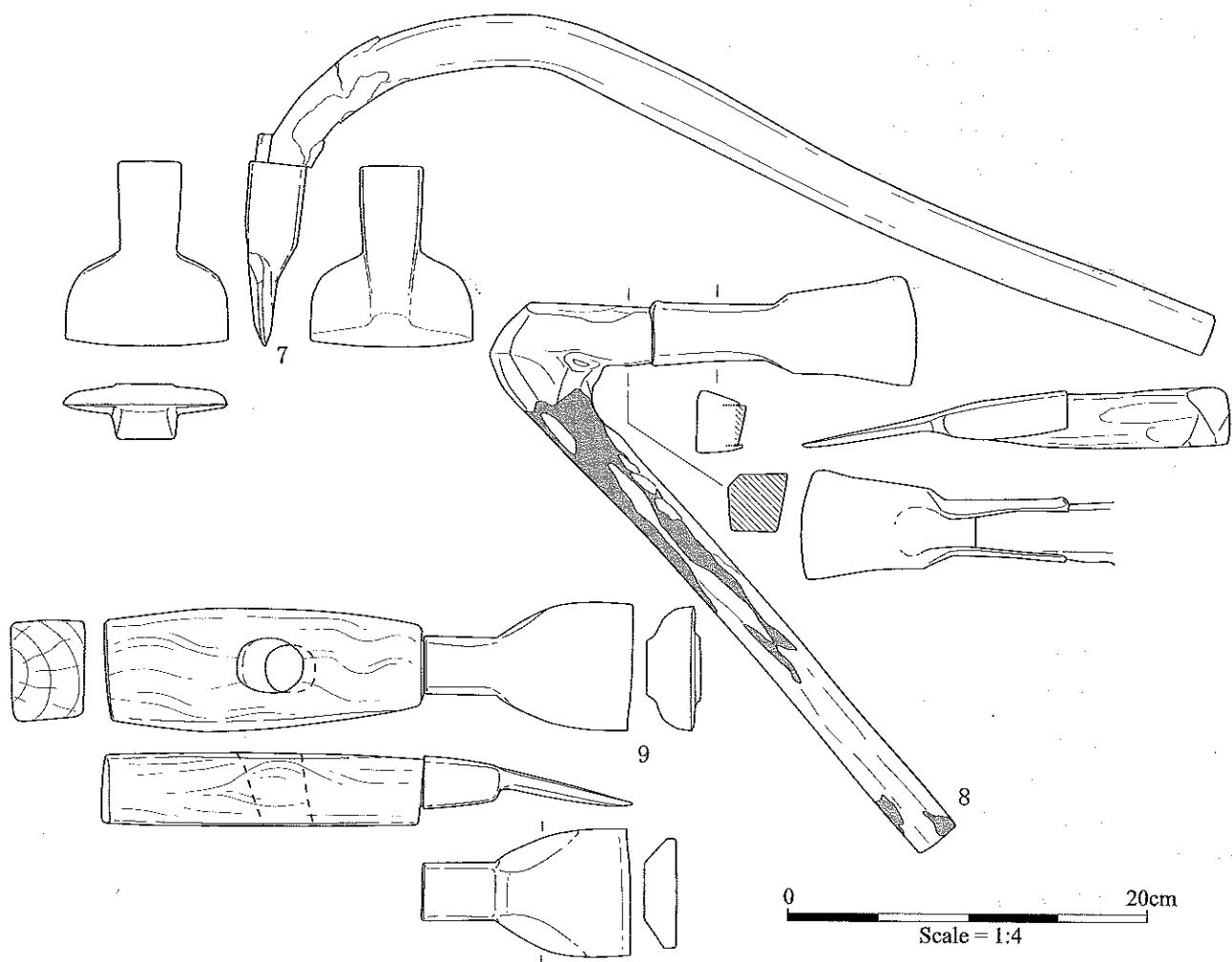
刃はいずれも両刃であるが、刃部の位置がわずかに左面側、すなわち袋部の開放部側に寄つたものが多い。渡邊晶氏は、このような刃を偏心両刃と呼んでいる(渡邊 2004)。ただし、偏心両刃の鉄斧であっても、台木への取り付け方によって偏りなく刃部を取り付けることは可能である(第4図4)。少數ながら刃が右面に寄つたものもある(資料番号3647:写真図版1-②)。佐原真氏によれば、刃部が左面側に寄つた偏心両刃は、スイスの石斧にも見られるという(佐原 1994)。

次に台木と柄についてであるが、上江洲均氏によれば、台木はカシ、柄はアデクの木で作られる(上江洲 1973)。台木は普通、断面長方形で上下に厚く、左右に薄い。柄の取り付け部が最も厚く、後に向かって徐々に厚みを減じる。刃の取り付け部は一段低く台形に削り出している。この削り出しは、資料番号3647(写真図版1-②)のように下面のみにある場合と、上下面にある場合(第3図1、2)、さらに右面にも削り出しが及ぶ場合(第3図3、第4図4、6A)がある。台形の長辺が右面に、短辺が左面に来るよう削ってあるのは、上述の刃の取り付け方法に関係するためである。台木の表面は平滑で、削痕(ヤスリ痕)の著しいもの(第3図1)も見られる。台木を上面から俯瞰した場合、正中線にほぼ対称に作られている場合(第4図4)もあるが、わずかに左面側が膨らんだ形状となるものも多く、何らかの意味があるものと思われる。なお、第4図6Aの台木は他の例とは違って成形が簡単で、樹皮を取り除いた分割材を利用し、刃の取り付け部と後端のみに集中的に加工が加えられている。また柄孔の位置が他の例に比べて後に寄つている点も注意される。

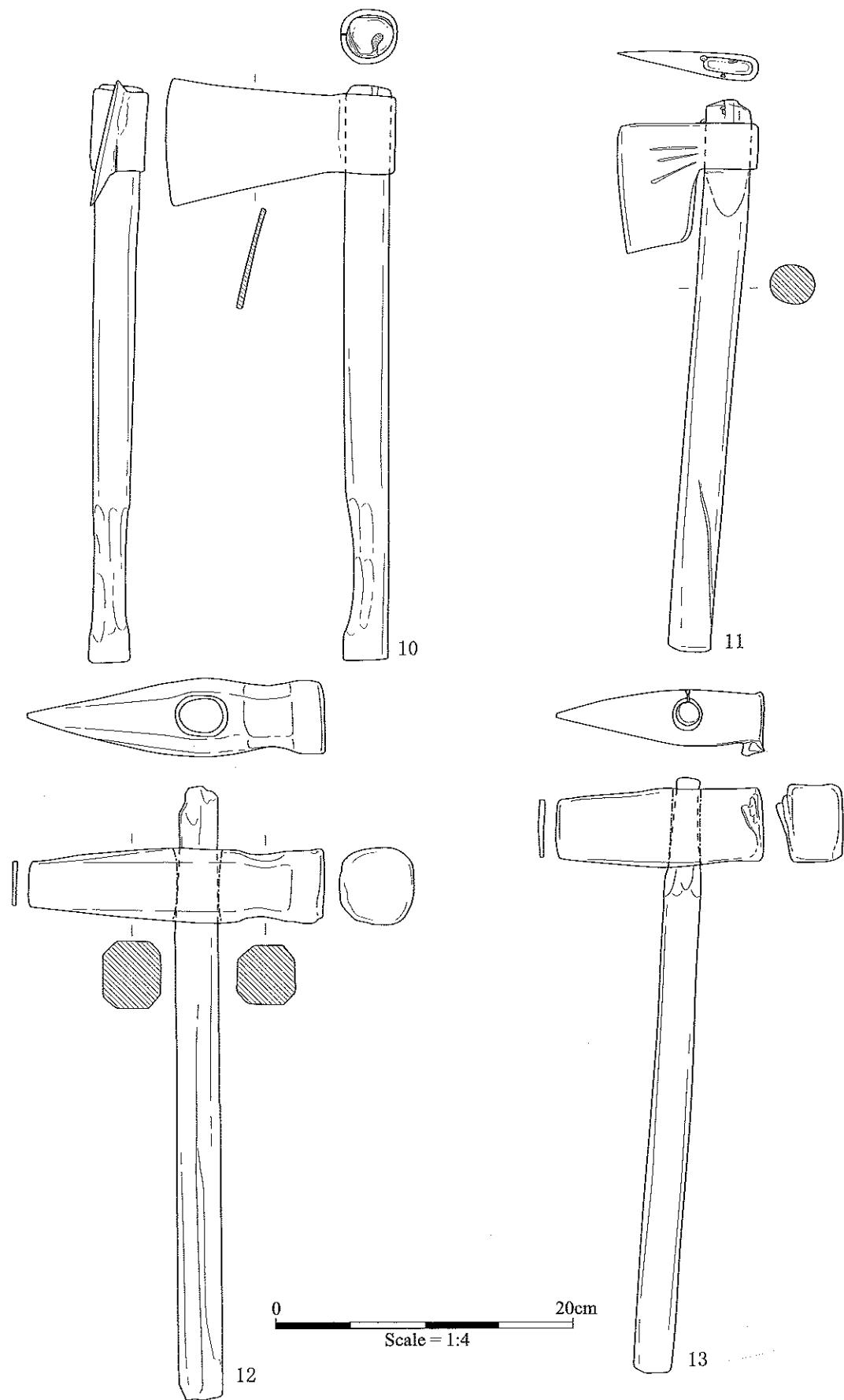
柄の残るものは5例あり、長さはおおむね70~80cm前後であるが、第3図3の柄は56cmと短い。柄



第4図 I類（ウーヌ型） 縮尺 1 / 6



第5図 II類（ティーン型） 縮尺 1 / 4



第6図 III類（ユチ型） 縮尺1/4

孔は台木に対して真っ直ぐあけられている場合と、斜めにあけられている場合があり、柄の角度には鋭角（第3図1）、直角（第3図3）、鈍角（第3図2）の変化がある。上江洲均氏は、大宜味村謝名城の民俗例の斧について記載する中で、山仕事用の斧と家庭での薪割り用の斧が本来は別々に備えられていたことを述べており、「山用はいくぶんニリをうつむきかげんにつける」と記している（上江洲 1948）。柄は、台木にあけられた柄孔に通して皮や竹、繊維を挟んで固定する。柄孔の形状には、第3図1、3、第4図4のように上部が広く下部が狭くなるものがしばしば見られる。これは柄を抜けにくくするための工夫であろう。また、1や2の柄には、細かい斜めの平行した削り痕が密に見られるが、これはすべり止めとしての効果を意図したものと推測される。

B. 鉄斧II類（ティーン型）（第5図）

鉄斧II類（ティーン型）は全部で7例ある。このうち、柄と刃が揃った完全なものは4例で、柄を失って台木と刃のみが残るものが3例ある。このうち横斧は6例、縦斧は第5図8の1例のみで、これはサトウキビ収穫用斧とされるものである。

まず刃の形態について見ると、第5図7、9は袋部が密閉されるもので、同様のものは6例ある。同図8は袋部が開放されるもので1例のみ。前者の刃の幅には、9cm程度のものと7cm程度のものがある。後者の造作は農具のヘラと同様である。刃部は弧状を呈するものが多い。全体に鋒が著しいので両刃と片刃の区別は難しいが、片刃となるものが多く、両刃も3例見られる。よく使い込まれて斧身がかなり短くなったものもある。片刃と判断される例では、刃部の研ぎ出しが必ず前面（第5図8では左面）に位置する（前主面片刃）。

柄の形態は後で一括して述べるが膝柄（I、II類）、曲柄が見られる。第5図7、資料番号3210（写真図版2-⑧）は曲柄で、刃の装着部は後面側を除く3面を削って茎を作り出している。また刃の装着には木のクサビが用いられている。

第5図8の膝柄は材の分岐部を利用したもので、刃を装着する台部は台形に削り出されており、荒く削られた握り部分には部分的に樹皮が残る。この種の斧は、刃の取り付け方によって横斧としても使用

可能であり、実際に、石垣市カンドウ原遺跡出土品には、同様の刃と膝柄を有する横斧が見られる（第9図4）。

3例ある組合式膝柄は、すべて柄を失っている。第5図9は、上下に薄く左右に厚い断面長方形の台木のほぼ中央に斜めの柄孔を有する。柄孔は上側が広く、下側が狭い。刃部は片刃で、台木の上面に沿うように取り付けられている。資料番号2420、3581（写真図版2-⑪、⑫）もほぼこれと同様であるが、刃部は両刃である。

C. 鉄斧III類（ユーチ型）（第6図）

第6図10、11のようなものはウースやティーンとも呼ばれるようだが、ここでは孔式斧をIII類（ユーチ型）とした。全部で7例あり、いずれも縦斧である。当博物館所蔵の鉄斧III類には、木材を対象としたもの以外に、石材加工用の斧（石ユーチ）も含まれる。このほかにも、鍛冶師が使用する鑿の中にも斧に似た形態のものがあるが、当博物館には収蔵されていないので、今回は言及しない。

III類鉄斧の斧身の形態を見ると、基部から刃部に向かって広がるもの（第6図10）、基部から刃部に向かって狭まるもの（同図12）、鍔形のもの（同図11）などのバリエーションが見られる。刃部はわずかに弧状を呈するものが多い。第6図10の斧身は、筒状の柄孔部と刃部を別々に作り、後で鍛接したものである。縦斧であるが、柄に対して斜めに刃が振れている。同図11の斧身の左右面には三条の刻線がある。類似の刻線は資料番号3218（写真図版3-⑯）にも見られる。ただしこちらの刻線は几字状を呈する。

第6図12、13はいわゆる石ユーチで、石工が切り出した石材の仕上げに用いるものである。斧身刃縁は狭い平坦面を形成し、斧身基部には叩打の痕跡が著しい。13の柄孔は、上部が狭く、下部が広く、柄の上端に釘を打ち込んで留めている。資料番号3218（写真図版3-⑯）も、石ユーチと同様な用途のものと思われる。資料番号3238（写真図版3-⑰）のイヤは、柄の折れた石ユーチを石割り用の楔に転用したものである。

鉄斧III類の柄は、いずれも棒状の直柄で断面は円筒状を呈するが、第6図11の斧身装着部は扁平に削

りだされている。資料番号3356（写真図版3-⑯）は柄が残っていないが、同様の柄がつくのであろう。また、同図10の持ち手付近には手掛けかりを良くするための削り込みが見られる。

2-2 斧柄の分類

以上、斧を分類ごとに記載した。ところで、斧の刃が取り付けられる柄にもいくつかの種類が見られるので、ここで斧柄についても一括して分類、記載しておきたい（第2表）。

第2表 柄の分類

柄の分類	形態	対応する斧
膝柄I類	一木式膝柄	II類
膝柄II類	組合式膝柄	I類、II類
直柄I類	茎式斧挿入用の柄孔をもつもの	民俗例になし
直柄II類	孔式斧用の棒状柄	III類
曲柄	湾曲をもつもの	II類

A. 膝柄I類（一木式膝柄）

膝柄I類は、当博物館所蔵資料中に二例あり、いずれも斧台と柄は鋭角に交わる（第5図8、資料番号3209：写真図版2-⑦）。

なお、北谷町伊礼原遺跡で発見された縄文時代前期の斧柄とされる未成品は、材の分岐部を利用した一木式膝柄で、素材はクチナシと報告されている（北谷町教育委員会 2007: 139-143頁）。伊礼原遺跡の斧柄未成品は、縄文時代の沖縄で、このような形態の斧柄が使用されていたことを示す貴重な例である。

B. 膝柄II類（組合式膝柄）

台木と柄を組み合わせる、いわゆる組合式膝柄を膝柄II類とする。膝柄II類に見られる台木は雇柄とも呼ばれる（吉川 1984など）。佐原真氏の言う袖（sleeve）も台木に似るが、佐原氏は斧身の全周を巻くものを袖とし、組合式膝柄の台とは区別して扱っている（佐原 1977）。袖の機能について佐原氏は「斧身と柄との結合を強化して斧身の脱落をふせぐことにある」と述べており、組合式膝柄の台木とは

この点において差異がある。

斧身に袋式、茎式、孔式の区別が見られるように、台木と柄の取り付け方式にも袋式、茎式、孔式の形態がありうるが、沖縄の組合式膝柄の台木は管見の限りではすべて孔式である。柄孔の上部が広く、下部が狭く作られたものがあるが、これは柄が抜けないための工夫であろう。

膝柄II類は、鉄斧I類（ウーヌ型）と鉄斧II類（ティーン型）の柄として見られるもので、前者では台木の形状はほぼ一定であるが、後者の台木には二つのタイプがある。すなわち、第5図9のように幅に対して長さが短く、寸詰まりの長方形状を呈するものと、鉄斧I類（ウーヌ型）の台木のように細長いものが見られる。後者の例は、当博物館収蔵資料中には存在せず、ここに図示することはできないが、石垣市立八重山博物館や竹富島喜宝院蒐集館収蔵資料中にあり、内原節子氏は「マイカブ」としてこの種の柄を有する鉄斧II類を紹介している（内原 1987）。

膝柄II類の柄と台木のなす角度は、普通鋭角～直角であるが、鉄斧I類（ウーヌ型）では鈍角になるものも見られる（第3図2）。

前述のように、鉄斧I類（ウーヌ型）は、柄を外した状態で使われることもあったようで、『東村史』（東村史編集委員会編 1988）には、台木に刃を取り付けた状態の斧を直接手で持つて、クサビを削る場面を写した写真が掲載されている（第1図B）。

ところで、吉田金次氏は斧柄の形状について論じる中で、「わが国では早くから雇柄式がおとろえて、僅かに『小手斧』の着柄にのみ化石のように残った」（吉川 1984: 79頁）と述べている。しかし、沖縄の民俗例では鉄斧I類（ウーヌ型）、すなわち渡邊晶氏（2004）の言うA類、B類斧の柄として組合式膝柄が見られることは、特筆すべき点であろう。

C. 直柄I類

柄に茎式の斧身を挿入する孔を有する形式のもの。当博物館資料中には見られないが、後述するように 笹森儀助が記載した黒島の石斧の使用法（笹森 1968）は、このような柄に挟み込む形式のものであつた可能性がある。まだ沖縄からの出土例はないが、先史時代の石斧の柄にもこのような形式の柄が使用されていた可能性がある。

D. 直柄II類

まっすぐな棒状の柄で、斧身に設けられた柄孔に挿入する形式のもの。鉄斧III類（ユーチ型）の柄である。

E. 曲柄

鉄斧II類（ティーン型）の柄として2例見られる。曲線的な枝材を利用し、曲げを加えて作るもの（第5図7）と、材分岐部を利用して削り出すもの（資料番号3210：写真図版2-⑧）があるらしい。

斧柄と斧型式との対応関係を第2表に示す。斧I類と膝柄II類、斧III類と直柄II類は完全に対応するが、斧II類のみ対応する柄の型式が多様である。

2-3 木取り

柄の分類について述べたので、ここで斧柄の木取りについても二三言及しておきたい。斧柄の表面は整形・調整が著しく、木取りについては多くを記すことができないが、本報告中に2例存在する膝柄I類は、材の分岐部を利用したもので、いずれも幹部を台部とし、枝部を握り部とする。このような木取りの膝柄は縄文時代前期の鳥浜貝塚例（網谷1996）以降、数多く知られている。なお、伊礼原遺跡出土の膝柄I類（北谷町教育委員会2007）は、枝部を台部、幹部を握り部とする点で、民俗例の膝柄とは異なっている。

膝柄II類（組合式膝柄）の台木の木取りには多少の変化が認められる。いずれも半割材あるいは半割材に近い分割材で、芯去り材となるものが多い。輪層が刃線にほぼ平行するものとほぼ直交するものがあるようだが、前者が多いようである。膝柄II類の木取りについては、今後観察例を蓄積した上で再度検討したい。

曲柄の木取りについては柄の分類の項で述べた通りである。

2-4 斧の重量

次に、斧の重量について見ておきたい。

鉄斧I類（ウース型）の重量は、完全なもので1.5～2.3kgで2kg程度のものが多い。鉄製の刃の重量は、計測可能なものでは0.9～1.5kgであるから、斧

全体の重量の過半は刃の重量ということになる。

鉄斧II類（ティーン型）の重量は、柄の短い小型のもので0.4kg、大型のもので0.6～0.8kg、膝柄II類（組合式膝柄）については柄を失った台木と刃のみであるが、0.7～1kgとやや重い傾向がある。

鉄斧III類（ユーチ型）の重量は、石工用の斧で1.2～2.6kg、刃の薄い通常のものでは0.4～0.5kgである。資料番号3356（写真図版3-⑩）は鍔状の刃のみであるが1.6kgと鉄斧I類の刃よりもさらに重い。

なお、今回紹介した斧には未使用のものは含まれておらず、全て使用中あるいは使用済（used up）の品なので、本来の重量は今回の計測値よりも多少重くなるはずである。

2-5 刃部の消耗

ここで刃部の消耗について一括して記載する。今回紹介した鉄斧の刃部には、使用痕が観察できるものはないが、特徴的な刃の消耗が見られる例がある。第3図3の縦斧は、刃線の上寄りが深く損耗している。これは佐原真氏の言う偏刃（佐原1994:117頁）に類するものと言える。同様の例は、第4図6Bにも認められる。偏刃ほどではないが、第6図11の縦斧では刃線の上端部がやや丸みをおびており、これも使用に伴う刃の消耗を示すものと考えられる。このように、当博物館所蔵の縦斧においては、刃線上寄りの消耗が顕著である。佐原真氏が紹介するセミヨーノフの研究によれば、ロシアの現代の鉄斧の場合、大工用の縦斧では使用者から遠い方の角を打ちこむため、後ろの角の方が損耗する。これに対して薪割り用の縦斧は厚く重く、大きな力で打ち割るために、逆に使用者側に近い方の角を打ちこむので、前の角の方が損耗するという（佐原前掲:118頁）。

管見の範囲内では、竹富島喜宝院蒐集館収蔵資料中に刃線の下寄りが損耗した鉄斧I類が1例ある。この斧は、刃の幅が11cm、長さが15.5cmもある大型のものである。したがって、沖縄においてもセミヨーノフの指摘するような刃の損耗図式が当てはまる可能性があり、今後の検討が必要である。

3. 文献史料に見る斧

次に、近代以前の沖縄における斧の実態を伝える

文献史料について見ておきたい。

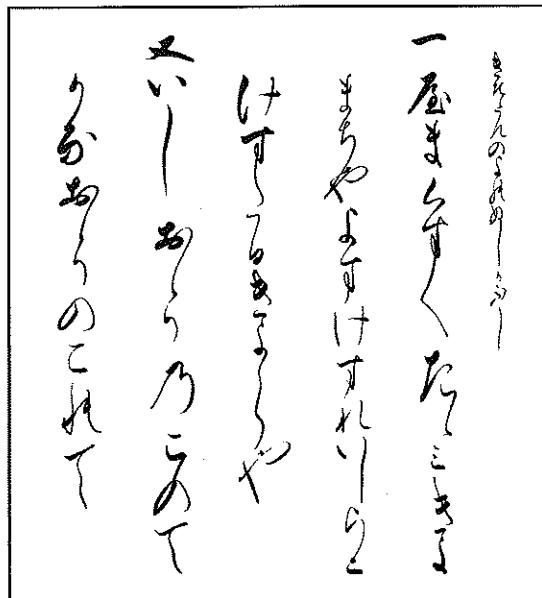
3-1 『李朝實錄』の斧

『李朝實錄』の『成宗康靖大王實錄』卷第105(日本史料編集編纂会編 1979)中に採録されている、1477年(尚真王即位の年)に琉球に漂着した朝鮮人の閩伊(与那国)島見聞記に斧が登場することは、上江洲均氏(1980:10頁)や朝岡康二氏(1991:157頁)が指摘している。そこでは「一、刈草及禾用鎌、研用斧・鏃子。」と記され、草や禾を刈るには鎌を用い、切るには斧や鏃子を用いたという(中山盛茂編 1969)。斧は縦斧、鏃子は横斧のことであろう。

3-2 おもろに謡われた斧

沖縄最古の歌謡集である『おもろさうし』には、「いしおうの」、「かなおうの」の名で斧が登場する。1623年に編集された「第二十 こめすおもろの御さうし(天啓三年癸亥三月七日)」中の「きたたんのよのしが節」に、以下のように謡われている(第7図)。

やまぐすく たたみきよ
まちやよす けずれ
いしらご けずたる きよらや



第7図 『おもろさうし』に見る斧

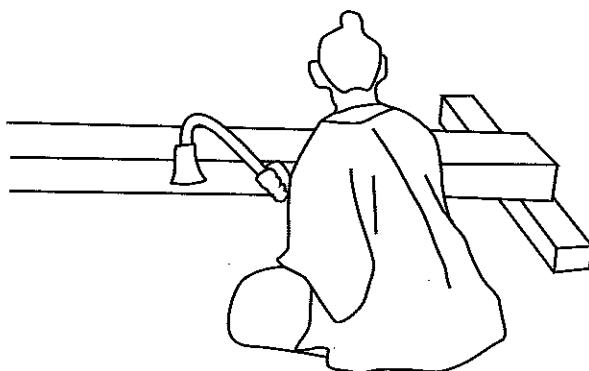
いしおうの こので
かなおうの こので

(訳) 山城の貴人は立派な方である。貴人のために、石工のまちやよこそ崖を削れ。石を削っている様の輝いて美しいことよ。石斧、金斧を作つて、石を削る様の見事なことよ。(外間 2000:316頁)

内容は、石工のまちやよが、山城の貴人のために石を削る様子を謡ったおもろで、石斧と金斧が対語として用いられている(嵩元 1983)。石と金は、『おもろさうし』中にたびたび登場し、例えば「第十七 恩納より上のおもろ御さうし」中の「ちやうやうへましが節」にも「石へつはこので 金へつはこので」(外間前掲:246頁)というように、対語として見える。石斧で石を削るというのはいかにも奇妙であるから、上のおもろに見える「いしおうの」は、石斧そのものの使用をあらわすというよりも、単純に修辞的表現と考えた方が良いだろう。

3-3 『南島雜話』に見る斧

幕末の奄美の風俗を記した『南島雜話』(名越 1984)にも斧が登場する。「村人加勢シテ居室ヲ作ル図」では、地面に座した人物が、II類(ティーン型)の曲柄手斧で建築部材を削りだしている様子が描かれている(第8図:前掲文献64頁)。図中、手斧の刃は木材の長軸に平行するように用いられているが、『東村史』巻頭の写真図版にも「手斧を使う」として、ほぼ同様の所作を示す写真(第1図C)が掲載されている(東村史編集委員会編 1988)。た



第8図 『南島雜話』に見る斧(模写)

だし、後者は立位で斧を扱っている点が異なる。『南島雑話』には、この他にも斧の描写が見られるが、描かれている斧はⅡ類（ティーン型）あるいはⅢ類（ユーチ型）で、Ⅰ類（ウーヌ型）は見られない。

3-4 笹森儀助の見た石斧

明治二十六（1893）年、沖縄の島々をめぐり『南島探検』を著した笹森儀助は、黒島の住民が石斧（雷斧）を使って薪を割る様子を以下のように記録している。

「…黒島ノ一人民雷斧石ヲ棒切ノ中間ニ挟ミ之ヲ太キ薪ニ当テ石ヲ以テ打テ薪ヲ割ルアリ蓋シ石器時代ノ遺風ナルベシ…」（笹森 1968：303頁）

これによれば、黒島では薪を打ち割る際の楔として石斧を利用していたようである。

以上をまとめると、文献史料からは次のようなことがわかる。

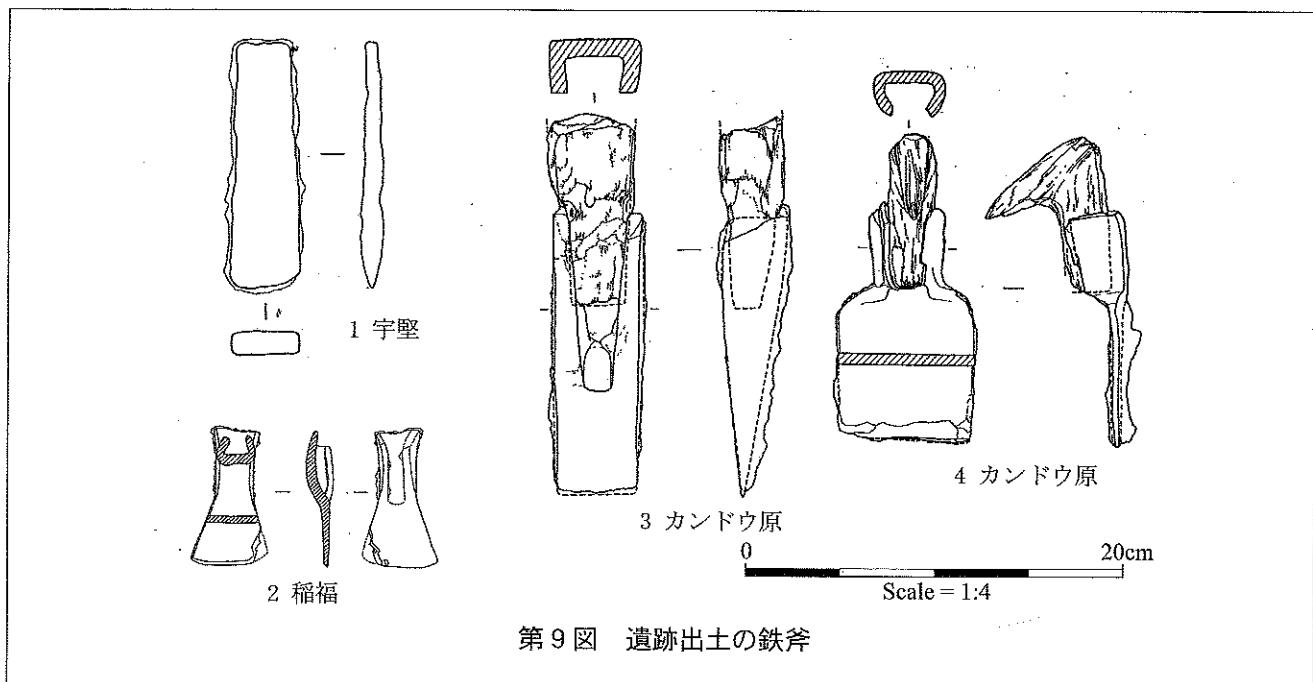
- ① 15世紀の与那国島では縦斧、横斧が使用されていた。（『李朝實錄』）
- ② 17世紀には石切り斧（石ユーチ）が使用されていた。（『おもろさうし』）

- ③ 幕末の頃の奄美では鉄斧Ⅱ、Ⅲ類が使用されていた。（『南島雑話』）
- ④ 19世紀の黒島では石斧が使われていた。（『南島探検』）

4. 遺跡出土の鉄斧

沖縄の遺跡から出土する鉄斧および鉄製品については、『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』（沖縄県立博物館 1997）に詳しい。遺跡出土の鉄斧の報告例としては、久米島ヤジャーガマの鉄斧Ⅲ類（ユーチ型）が早く（安里 1975）、続いて上江洲均氏は、久米島下地原洞穴収集の鍬先を報告する中で、同洞穴収集の斧についても言及している。上江洲氏は、「ヤジャーガマ収集のヨキ（鉄斧Ⅲ類：筆者註）が古いのか、下地原洞収集の斧（鉄斧Ⅰ類：筆者註）が古いタイプなのか、今のところはっきりした決め手はない。ただ、後者が、沖縄的特色を持つ斧といえるように思う」（上江洲 1980：10頁）と述べている。

さらに、弥生並行時代のうるま市宇堅貝塚から板状鉄斧（茎式鉄斧）が（第9図1：具志川市教育委員会 1980）、読谷村中川原貝塚から袋式鉄斧が発見されるに至り、沖縄における鉄器の使用が、弥生時代後期に並行する時期までさかのぼることが明らかとなった（沖縄県立博物館 1997）。袋式鉄斧は、



第9図 遺跡出土の鉄斧

グスク時代に属する南城市稻福遺跡（上御願地区）（第9図2：沖縄県教育委員会 1983a）や、近世の石垣市カンドウ原遺跡（第9図3、4：沖縄県教育委員会 1983b）でも出土している。後者の袋式鉄斧は、本稿分類の鉄斧I類（ウーヌ型）、II類（ティーン型）と実質的には同じものと言って良い。

渡邊晶氏によれば、伐採用の袋式鉄斧は、弥生時代に現れ中世まで斧の主流をなしているが、14世紀以降、孔式縦斧に統一されていくという（渡邊 2004）。したがって、沖縄の民俗例における伐採用斧としての袋式鉄斧、すなわち鉄斧I類（ウーヌ型）の存在は、この種の斧が中世以来の遺存種である可能性を示唆する。稻福遺跡などグスク時代の遺跡から発見されている袋式鉄斧が、伐採斧として用いられたという証拠はないが、稻福遺跡の鉄斧は偏刃の状態から縦斧の可能性も考慮されるもので、今後、物的証拠によって考古資料に見る鉄斧と民俗資料に見る鉄斧との関係の解明が望まれよう。

『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』（沖縄県立博物館 1997）によれば、これまでに知られている沖縄の遺跡出土の鉄斧には、I類（ウーヌ型）、II類（ティーン型）、III類（ユーチ型）のすべてが見られる。特に、下地原洞穴やカンドウ原遺跡の鉄斧I類（第9図3）は、現在の民俗例のものより小型である点が注意される（上江洲 1980）。鉄斧II類は、農具のヘラとの区別に問題を残すものも見られるが、カンドウ原遺跡の例は民俗例とほぼ同様であり、これよりも年代的に遡る稻福遺跡の袋式鉄斧は、上述のように縦斧の可能性も考慮される。

以上のように、考古資料から見た場合、沖縄では弥生並行時代に板状鉄斧（茎式鉄斧）と袋式鉄斧があり、グスク時代～近世には袋式鉄斧が、近世～近代には袋式鉄斧（I類、II類）と孔式鉄斧（III類）が存在していたことがわかる。孔式鉄斧はグスク時代にも存在したと思われるが、沖縄では主流となることはなかったようである。

沖縄の遺跡出土の鉄と鉄製品について技術史的観点から論じた大城慧氏は、「これまでに出土した製品についてみれば、そのほとんどが鍛造品で鍛冶技術によるものであり、鍛錬鍛冶を中心とした生産技術が存在していた」と述べている（大城 1997）。また、當眞嗣一氏は沖縄における鉄器研究を総括す

る中で、沖縄の鉄生産の主体は鍛冶技術であり、自前の鉄は生産しなかったこと、その一方でグスク時代においては材料鉄から製品を作り上げる技術や、鋳鉄鍋等の破片をリサイクルする修理再生加工技術などがかなり発達していたことを指摘している（當眞 2005）。今回紹介した鉄斧I類をはじめとする沖縄の特徴ある斧は、先史時代に伝來した鉄器文化が沖縄に定着し、発展していく中で生み出されていったものと考えられ、沖縄における鉄文化の歴史とも深く関わるものと言えよう。

5. おわりに

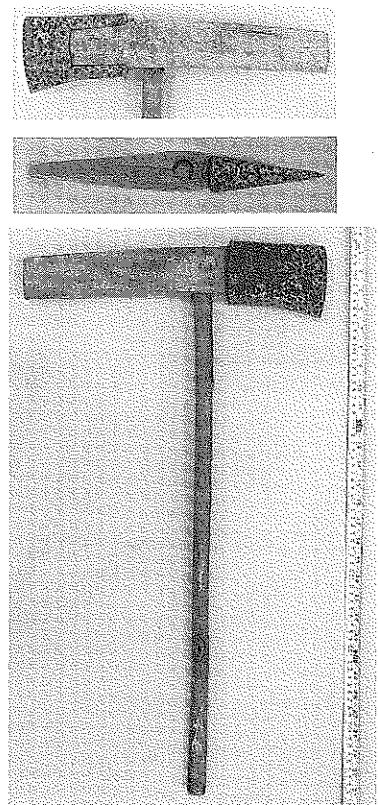
本稿では、当博物館所蔵の斧についてI～III類に分類し、記載した。また、合わせて文献上に見える斧や考古資料としての出土品についても言及した。沖縄の斧には、I類（ウーヌ型）をはじめとして、日本本土の斧には見られない特徴がいくつも認められ、現存資料について、さらなる調査が必要と思われる。今回は基礎資料の報告を主眼としたため、考察は別稿に譲りたい。

小稿をまとめるにあたり、大堀皓平、片桐千亜紀、岸本敬、崎原恭子、笛田朋孝、瀬戸哲也、羽方誠、萩尾俊章、與那嶺一子の諸氏にはさまざまにご教示、ご援助いただいた。篤く御礼申し上げる。

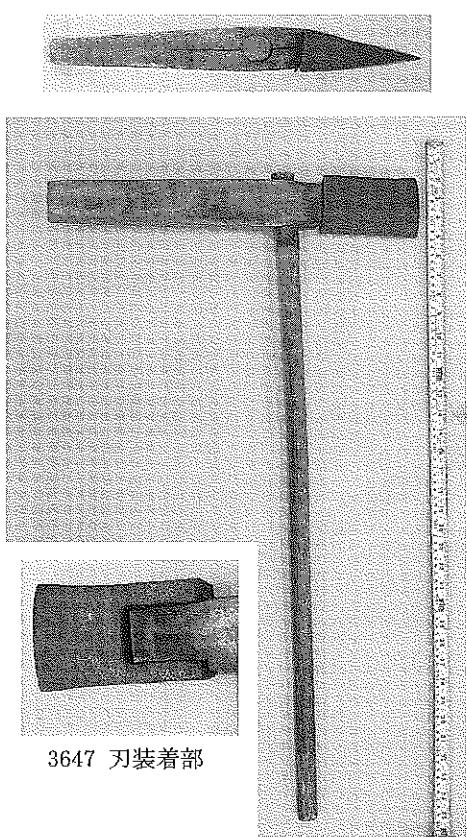
参考文献

- 朝岡康二 1991 『南島鉄器文化の研究』 溪水社
安里 進 1975 「グシク時代開始期の若干の問題
について—久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から—」
『沖縄県立博物館紀要』 第1号 沖縄県立博物館
36-54頁
網谷克彦 1996 「鳥浜貝塚出土の木製品の形態分
類」『鳥浜貝塚研究』 1 1-22頁
糸満市史編集委員会 1991 『糸満市史』 資料編12
民俗資料
上江洲 均 1973 「ウーヌ 国頭郡大宜味村謝名城」
『沖縄の民具』考古民俗叢書12 慶友社 226頁
上江洲 均 1980 「久米島下地原洞収集の鍬先に
ついて」『沖縄県立博物館紀要』 第6号 沖縄県
立博物館 9-14頁
上江洲 均・神崎宣武・工藤員功 1983 『琉球諸
島の民具』 未来社

- 上江洲 均 2005 『沖縄の民具と生活－沖縄民俗誌 I－』 琉球弧叢書11 榕樹書林
- 内原節子 1987 「西表島・網取村の刳り舟」 『石垣市立八重山博物館紀要』 第6号 5－17頁
- 大城 慧 1997 「沖縄の鉄とその特質」 『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』 沖縄県立博物館・美術館 12－17頁
- 沖縄県教育委員会 1983a 『稲福遺跡発掘調査報告書（上御願地区）』 沖縄県文化財調査報告書第50集
- 沖縄県教育委員会 1983b 『カンドウ原遺跡発掘調査報告（I）－排水溝に伴う緊急調査』 沖縄県文化財調査報告書第49集
- 沖縄県教育委員会 1991 『西表島船浦スラ所跡』 沖縄県文化財調査報告書第101集
- 沖縄県立博物館 1997 『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』
- 具志川市教育委員会 1980 『宇堅貝塚群・アカジャシガ一貝塚発掘調査報告』
- 幸喜 均 1989 「第三章 第三節 林業と狩猟」 『宜野座村誌』 第3巻資料編III 民俗・自然・考古 宜野座村役場 208－226頁
- 佐原 真 1977 「石斧論－横斧から縱斧へ」 『考古論集』 松崎寿和先生退官記念事業会（佐原 真 2005 『佐原真の仕事2 道具の考古学』 岩波書店 所収：374－442頁）
- 佐原 真 1982 「石斧再論」 『古文化論集』 上 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会（佐原 真 2005 『佐原真の仕事2 道具の考古学』 岩波書店 所収：443－479頁）
- 佐原 真 1994 『斧の文化史』 UP 考古学選書6 東京大学出版会
- 嵩元政秀 1983 「石斧（せきふ）」 『沖縄大百科事典』 中 565頁
- 北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査』 北谷町文化財調査報告書第26集
- 當眞嗣一 2005 「沖縄における鉄器研究について」 『沖縄県立博物館紀要』 第31号 沖縄県立博物館 1－11頁
- 仲地 洋 1983 「斧（おの）」 『沖縄大百科事典』 上 613頁
- 中山盛茂編 1969 「朝鮮漂流民の（与那国・祖内・波照間・新城・黒島・多良間・伊良部・宮古・沖縄）見聞記」 『琉球史辞典』 琉球文教図書株式会社 552－559頁
- 名越左源太（國分直一・惠良 宏 校注） 1984 『南島雜話』 1・2 東洋文庫 平凡社
- 笹森儀助 1968 『南島探験』（復刻） 沖縄郷土文化研究会
- 日本史料編集編纂会編 1979 『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成 李朝實錄之部4』 国書刊行会
- 東村史編集委員会編 1988 『東村史』 第1巻通史 編 東村役場
- 外間守善校注 2000 『おもろさうし』 下 岩波文庫
- 吉川金次 1984 『斧・鑿・鉋』 ものと人間の文化史51 法政大学出版会

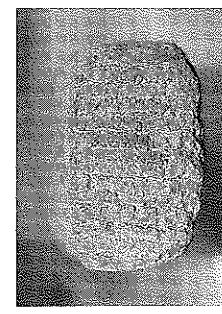


①1747 (約 1/10)

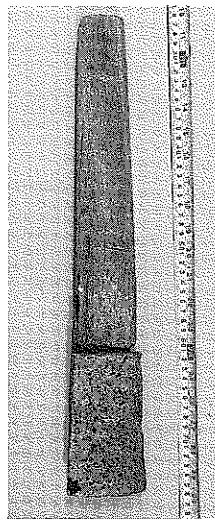


3647 刃装着部

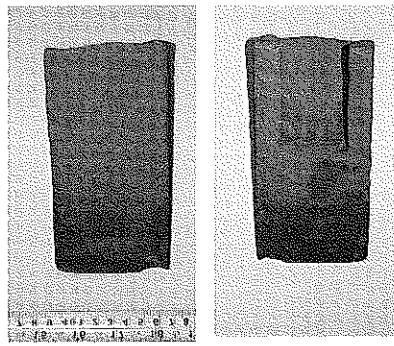
②3647 (約 1/10)



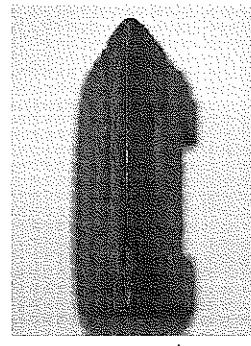
3355 台木基部



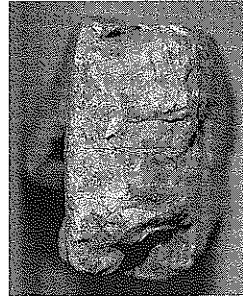
③3355 (約 1/8)



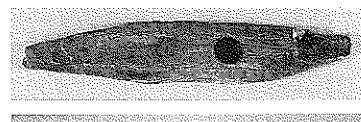
④1029 (約 1/5)



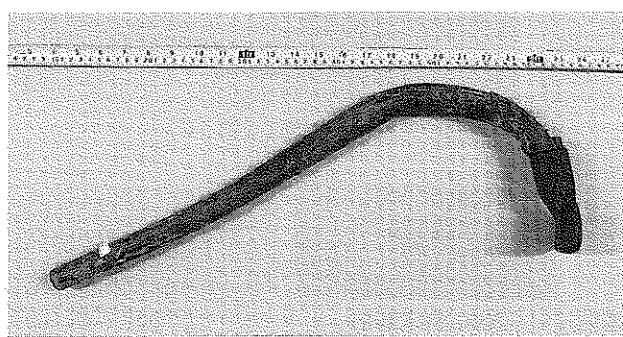
1029 の刃部



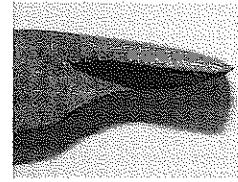
4127-2 台木基部



⑤4127-2 (約 1/10)

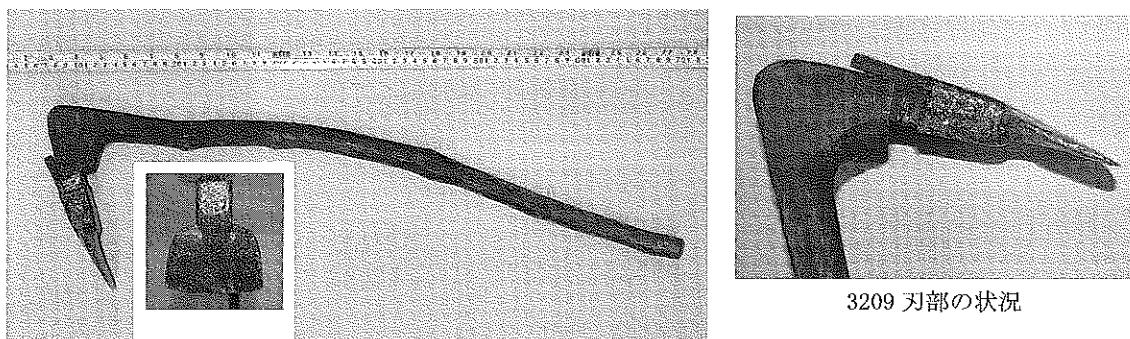


⑥1768 (約 1/8)



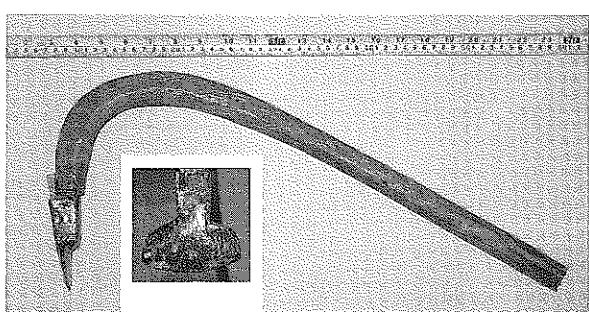
1768 の刃部

写真図版 1



3209 刃部の状況

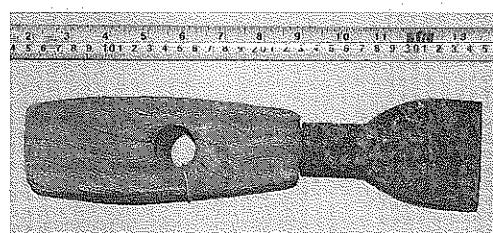
⑦3209 (約 1/8)



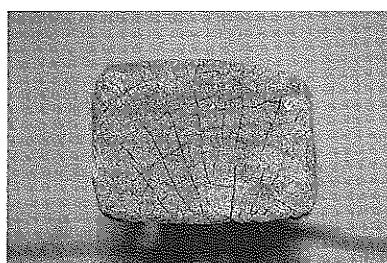
⑧3210 (約 1/8)



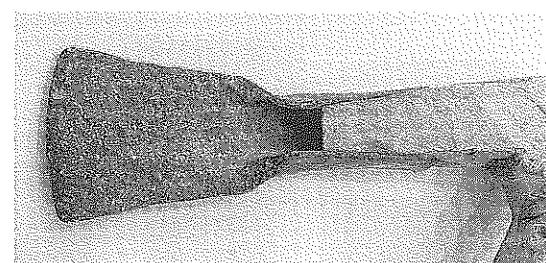
⑨3113 (約 1/6)



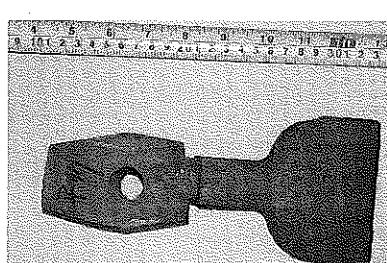
⑩4127-1 (約 1/5)



4127-1 台木基部



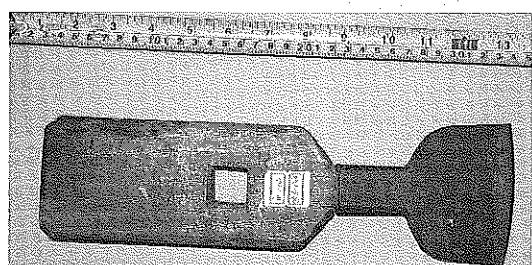
3113 刃の取り付け状況



⑫3581 (約 1/5)



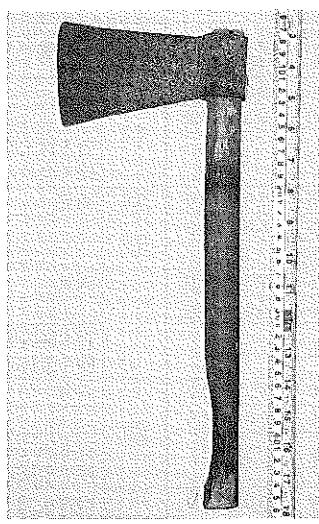
⑪2420 (約 1/5)



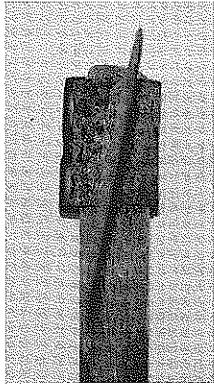
3581 台木基部

3581 刃部

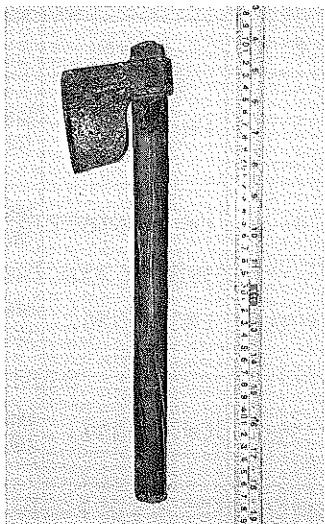
写真図版 2



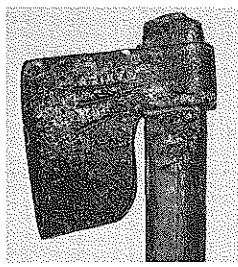
⑬1746 (約 1/6)



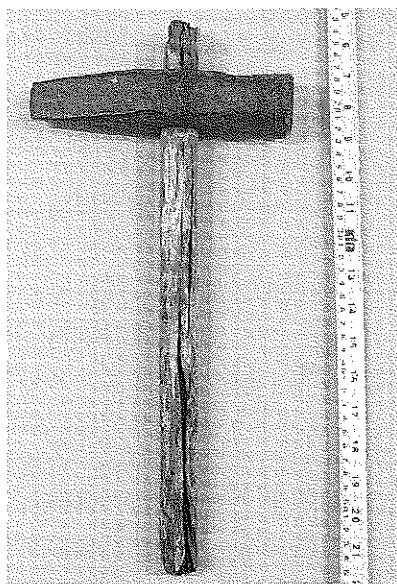
1746 刃の振れ



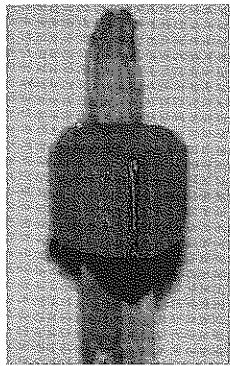
⑭3208 (約 1/6)



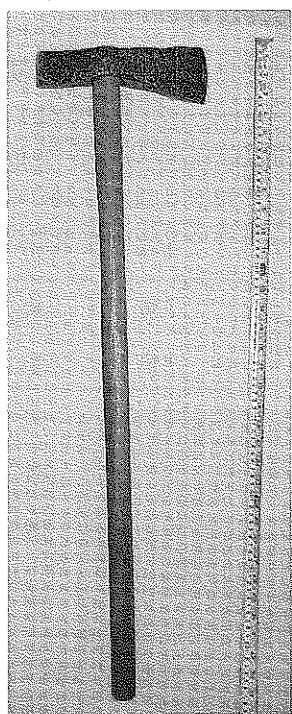
3208 の刃



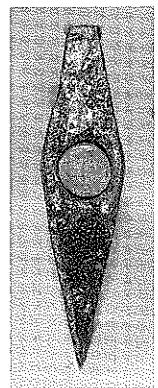
⑮3241 (約 1/6)



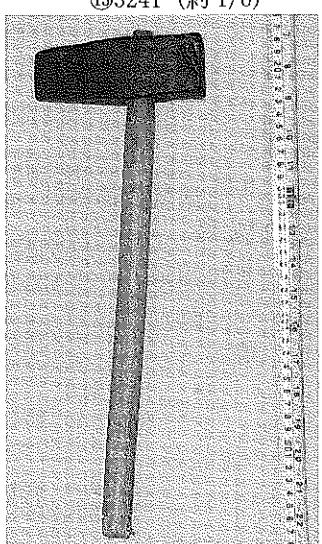
3241 の刃部



⑯3218 (約 1/10)



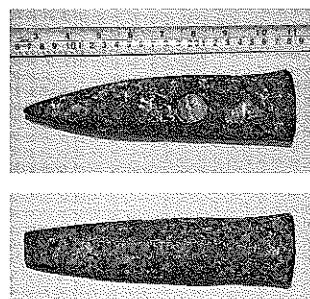
3218 刀部上面観



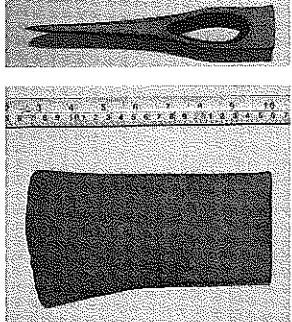
⑰3242 (約 1/6)



3242 の斧身基部



⑱3238 (約 1/6)



⑲3356 (約 1/6)

写真図版 3

第3表 当博物館所蔵の斧 一覧表

図番号	資料番号	写真版	名称	斧の分類	柄の分類	部位名称	法量(cm)			重量(kg)	備考
							全長	全幅	全厚		
第3図 1	2395			I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	15.0	8.0	3.5	2.2	両刃
						台木	38.0	6.5	5.0		台木挿入部を除く全長71cm
						柄	79.5	径2.5			
第3図 2	3207	ウーヌ		I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	12.5	7.0	4.0	0.9	両刃
						台木	33.5	5.8	4.2		
						柄	71.5	径2.8			
第3図 3	4107	石大工斧		I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	12.5	7.5	4.0	2.0	両刃
						台木	37.5	6.5	5.5		台木挿入部を除く全長50.5cm
						柄	56.0	径2.5			
	1747	1-①	ブヌ	I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	13.0	9.5	4.0	2.0	両刃
						台木	34.0	6.0	4.5		台木挿入部を除く全長64.5cm
						柄	70.0	径2.3			
	3647	1-②		I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	13.0	8.0	4.0	2.3	両刃
						台木	40.5	5.8	5.0		刃装着部の段が下面のみにある
						柄	83.5	径2.5			台木挿入部を除く全長76.5cm
第4図 4	3355	1-③		I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	14.0	7.5	4.3	1.7	両刃
						台木	39.0	6.0	5.0		芯去り材
第4図 5	1029	1-④		I類(ウーヌ型)	不明	刃	15.0	7.5	4.5	1.5	部分的に黒色を呈する
第4図 6	4127(2)	1-⑤	ウーヌ	I類(ウーヌ型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	台木(A)	40.0	7.5	8.0	0.7	分割材
						刃(B)	12.5	7.5	5.0	1.2	両刃
第5図 7	1768	1-⑥	ティーン	II類(ティーン型)	曲柄	刃	10.5	9.0	3.2	0.8	片刃
						柄	59.0	径4~3			曲柄
	3209	2-⑦	ティーン	II類(ティーン型)	膝柄I類 (一本式膝柄)	刃	10.2	9.0	2.8	0.6	片刃
						柄	63.0	径2.8			膝柄I類
	3210	2-⑧	ティーン	II類(ティーン型)	曲柄	刃	8.7	8.5	3.0	0.6	両刃
						柄	66.5	径3~2.5			曲柄
第5図 8	3113	2-⑨	ティーン	II類(ティーン型)	膝柄I類 (一本式膝柄)	刃	14.5	6.0	2.2	0.4	片刃
						柄	37.0	12.5	3.5		膝柄I類
第5図 9	4127(1)	2-⑩	ウーヌ	II類(ティーン型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	11.5	6.8	3.0	0.7	片刃
						台木	17.0	6.5	4.0		膝柄II類
	2420	2-⑪		II類(ティーン型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	12.0	9.5	3.2	0.7	両刃
						台木	9.5	6.5	4.0		膝柄II類
	3581	2-⑫		II類(ティーン型)	膝柄II類 (組合式膝柄)	刃	11.7	9.2	3.0	1.0	両刃
						台木	18.8	7.8	3.0		膝柄II類・「傳」の刻印あり
第6図 10	1746	3-⑬		III類(ユーチ型)	直柄II類	刃	15.0	8.5	3.5	0.5	刃の厚さ0.2cm
						柄	38.2	径2.5			刃挿入部を除く全長32.7cm
第6図 11	3208	3-⑭	ウーヌ	III類(ユーチ型)	直柄II類	刃	9.4	8.5	1.7	0.4	両刃
						柄	37.0	径2.5			刃挿入部を除く全長32.5cm
第6図 12	3241	3-⑮	石大工用斧	III類(ユーチ型)	直柄II類	刃	19.5	5.0	5.0	2.0	両刃
						柄	40.5	径3			刃挿入部を除く全長32.0cm
第6図 13	3242	3-⑯	ユーチ	III類(ユーチ型)	直柄II類	刃	13.5	5.0	3.5	1.2	両刃
						柄	39.5	径2.3			刃挿入部を除く全長34.0cm
	3218	3-⑰		III類(ユーチ型)	直柄II類	刃	22.5	7.5	5.5	2.6	両刃
						柄	84.0	径3~2			刃挿入部を除く全長79.5cm
	3238	3-⑱	イヤ	III類(ユーチ型)	(直柄II類)	刃	20.5	5.3	5.3	2.3	両刃・柄孔に柄の残片が残る
	3356	3-⑲		III類(ユーチ型)	(直柄II類)	刃	19.5	11.0	3.5	1.6	両刃

※「名称」は原簿上の名称である。